

肥育豚への飼料用米給与試験

○堀之内正次郎・中塩屋正志・岩切正芳  
(宮崎畜試川南)

【目的】

飼料自給率向上を目的とした飼料用米生産が全国で取り組まれており、家畜への給与技術の検討が行われている。飼料用米は配合飼料の一原料として有効活用できるが、コスト低減が大きな課題である。そこで、本県では飼料用米の加工の違いに着目した試験を実施した。

【材料および方法】

2008年11月28日から2009年1月19日に試験を実施した。供試豚は当場で生産したハマユウLW・Dの雌豚を用いた。試験区は飼料用米を10%配合し、玄米粉砕、粳粉砕の2種類に分けた2試験区を設け、1区あたり雌6頭を供試した。

試験期間は体重70～110kgとし、不断給餌とした。

調査項目は、肥育期間、出荷日齢、一日増体量、飼料摂取量、飼料要求率、出荷日齢、枝肉成績、飼料コスト、枝肉生産コスト、ロース肉の保水性、剪断力価、ロース肉中粗脂肪含量、脂肪酸組成、ロース周辺脂肪の脂肪融点とした。

【結果および考察】

第1表に発育成績・枝肉成績について示した。発育成績、枝肉成績については、いずれの項目も試験区間に有意差はなく、格付も試験区は全て上物であった。飼料摂取量について、粳粉砕区が高い値を示したが、これは粳殻の量が影響しているものと推察された。このことから、玄米粉砕、粳粉砕のいずれも配合飼料に対して10%までの混合割合で問題はないことが示された。

第2表に飼料および枝肉生産コストについて示した。飼料用米の価格については、飼料用米生産費からの推定で計算した。その結果、各試験区の飼料単価は肥育後期のみで対照区45円/kg、玄米粉砕区52.1円/kg、粳粉砕区50.6円/kgとなり、飼料用米10%混合で5～7円/kgのコスト高になった。枝肉生産コストについては対照区と比較して飼料用米給与区が8～13円/kg高くなった。

第3表に肉質分析結果について示した。いずれの項目も試験区間に有意差は認められなかった。本試験では出荷日齢が約5ヶ月で、試験期間が約

40日と短く、また、飼料用米の混合割合が10%とやや少なかったこと等が要因と推察された。

本試験では、発育、枝肉、肉質のいずれも差が見られなかった。飼料単価だけで比較すると粳摺費用のかからない粳粉砕の方が低コストになるが、配合飼料と比較するとまだ高い。このことから、飼料用米を利用するにあたっては、低コスト生産技術の開発、多収量品種の開発、飼料用米給与豚の差別化による高値取引等の対策が必要である。

第1表 発育成績および枝肉成績

	対照区	玄米粉砕区	粳粉砕区
肥育期間(日)	43.3	39.5	42.9
出荷日齢(日)	150.0	151.3	155.8
一日増体量(g/日)	973.7	995.7	993.7
飼料摂取量(kg)	125.6	118.9	130.5
飼料要求率	3.02	3.01	3.04
と体長(cm)	93.1	91.8	94.1
と体幅(cm)	35.7	35.5	35.3
背腰長(cm)	77.4	76.4	77.9
背脂肪厚(cm)	1.93	1.77	1.60
枝肉重量(kg)	76.1	74.9	74.5
歩留(%)	68.4	67.3	66.8
上物率(%)	67	100	100

第2表 飼料および枝肉生産コスト

	対照区	玄米粉砕区	粳粉砕区
飼料単価(円/kg)	45.0	52.1	50.6
枝肉1kg生産費(円/kg)	209.2	216.5	222.0

第3表 肉質分析結果

	対照区	玄米粉砕区	粳粉砕区
トリップロス(%)	2.1	2.1	2.2
加熱損失(%)	20.5	22.3	20.4
剪断力価(kg)	4.8	4.4	4.4
肉中粗脂肪含量(%)	3.4	3.0	4.1
肉中オレイン酸(%)	44.8	45.8	45.5
肉中リノール酸(%)	8.2	7.9	7.4
脂肪融点(°C)	34.0	32.1	31.8